

若き教師に求められる技術と資質

齋藤 公子¹

本稿は自身の教科指導、学校経営、教員の研修機関での実践、さらに大学での指導をもとに、教職を志す人間に必要なとされるものを探り、その育成にはどのような指導が考えられるかを考察したものである。教員として採用になり、その力量を遺憾なく発揮し、優れた実践者として成長していくために、新任教員として必要とされるものを探ることにより、教員を目指す学生への指導の視点を明らかにした。

Keywords : 学習集団、一斉授業、授業技術

1. はじめに

受講生のうち、約80%が教師を志す学生を対象とした講義の中で(中には免許取得のみが目的という学生もいた)次のようなアンケートを実施した。

小中高を通じて、「よい授業」を受けた経験はありますか。「ある」と答えた人はどのような授業であったか書きなさい。

「ある」が約85%おり、次のような記述があった。

- ①教科のおもしろさを伝えようと工夫した授業
- ②教師が熱意を持って教えてくれた授業
- ③自分の疑問を解決してくれた授業
- ④自分に実力がついたと感じた授業
- ⑤深く考えることができた授業
- ⑥教科のおもしろさに触れることができた授業
- ⑦「自分から学ぼう」とする気持ちのきっかけとなった授業 など

あくまでこれは生徒側から感じた漠然とした印象であるが、生徒はこのように感じたときよい授業を受けたと感じることがわかる。これらを見ると、生徒がよい授業を受けたと感じるのは本人の中に学習が成立し、充実感を感じたときであることが読み取れる。

また、とてもよい授業を受けたという経験を持つ学生の中に、強く教師を希望するものが多かった。

授業者は本来、生徒がそうした充実感を抱き、生徒の中に学習が成立するよう授業を組み立てていかなければならない。しかし、そうした授業の組み立て方法が分析的に示されることは少なかったように思う。

実はこれらの「よい授業」の印象は現場の教師が目指そうとする授業そのものでもある。しかし、現実の学校現場において、いつも生徒が満足できる授業が提供されているかという、決してそうではない。それは教師が怠慢であり、十分な授業の準備もせずに教壇に立っているからではない。そういう不届きな教師もいるかもしれないが、多くの、いえ、ほとんどの教師は「よい授業」を求めて教材研究や生徒の実態の把握、そして教えたことに対する評価などを行いながら、多忙な中、日夜、努力している。研修会に参加したり、先進校の視察に出向いたり、研究開発校として研究に取り組んだり生徒のために研鑽に努めている。しかし、多くの場合、そうした努力を積み重ね、よい授業ができるようになるのは、実際に教鞭を執るようになってから、ある程度の経験を経なければならぬのが現実である。

世に「授業がうまい」と言われる教師は多い。

1. 宮城県宮城野高等学校

しかし、その「よい授業」の多くはその教師のものであり、他の教師に受け継がれることは少ない。

歴史的にも優れた授業実践の記録は残されている。しかし、現実にはなかなか受け継がれない。それでも、不断の努力をし、経験を重ねながら、古今東西の教育実践などを学び、優れた実践を残す教師は存在する。

しかし、教師が力量を伸ばすまでの時間、生徒をあまり待たせることはできない。教師として教壇に立つ以上は、少なくとも教壇に立ったからにはできるだけ早く、授業は、あるレベルまで到達しなければならない義務を負う。

教師に求められるものについて語られるとき、教師としての熱意、信念などが語られることが多い。もちろん、もっとも大切なことではあるが、志ある若き教師が現場を去らざるを得なかったり、歳月を経る毎にゆがみを生じたりする教師を目の当たりにするとき、熱意や情熱、やる気といわれる精神論だけでは教育現場で実践していくことは難しいと感じ、それを支える技術の必要性を痛感するようになった。ここでは、よい授業を行うために、最低限の技術になると考える指導法の一端を示したいと考える。

教師の仕事を表現するとき、大きく教科指導と生徒指導とに分けて語られることが多い。筆者はそれは一体のものと考えているが、ここでは便宜上従来のように分けて記述する。

加えて、7以降は教師として、さらに成長していくために、身につけておくべき力について述べる。

2. 教科授業の重要性

教科の指導力は大きく2つに分けることができる。1つは教科に関する知識である。もう1つは授業を構成する技術力(授業力)である。

教科の知識については、教員として採用される以上は、ある一定の知識は備えていると考えてよいであろうし、採用後の個人の努力によって、さらに、充実していく部分であるので、今回は授業を構成する技術について述べたい。

教員は採用試験に合格し、その時から、教師として児童・生徒の前に立つことになる。初任者研修などの公的研修が用意され、さらに、同僚や上司から事務的なことの指導を受けるところから始まり、並行して、義務教育では初年度から学級担任ということも少なくない。(高校は1クラスに2人の教諭が配置され正副担任制を取る学校が多いが、義務教育においては副担任は学年に数名配置されることが多く、初任者のほとんどは正担任となる。)

授業の構成は自身の工夫に委ねられることになる。多くの初任者は、かつて自身が教わった授業を思い出し、形をまねてみたり、また、先輩教員の手法をまねたりしつつ、あるいは独自の方法を工夫したりし、経験を重ねていくことになる。

教科の授業についての指導は、初年度は、先輩教員が教科担当の指導教員として助言に当たるが、その後は、自分自身の努力によって授業を構成していく日常になる。

逆に言うと、授業について十分に指導を受ける機会はそれほど多くはないのが現実である。授業研究が盛んな学校に勤務したり、熱心な先輩教員に詳しく指導を受けたりできた教員は幸いであるが、すべての教員がそうした機会に恵まれるわけではない。歴史的な指導法などを紐解いて、自分自身の指導法を高めようとするゆとりができてくるのは採用になって数年が経過してのことであろう。日々生徒との格闘に明け暮れるのが初任の頃である。

教師が技術を持たないが故に、生徒が不満を募らせたり、それを抑えようとして、必要以上に課題を多く出したり、高圧的に生徒を押さえこもうとして、かえって授業が成立しなくなったりすることは実際に学校現場で起きていることである。学級崩壊や授業崩壊の要因の一つには指導技術不足もあると考えられる。

生徒にとって、学校生活の多くの時間を占めているのが授業である。教科の授業は教科内容を教えることのみに限らず、多くの事を指導したり教えたりする大切な空間であり時間である。日常的

な様々な指導的部分も、この教科の授業の中で行われることも多い。そういう意味で生徒指導と教科指導は一体とも言えるのである。

教科の授業が充実することはとりも直さず、その学校の教育が充実することに直結する。

学校の特色やその学校教育が語られるとき、授業以外の様々な教育活動が取り上げられることが多いが、学校教育の中核は授業である。教科の授業は様々な事を包含することができ、極端なことを言えば、授業が本来的に充実していれば、他の活動はそれほど多くはなくてもよいと言っても過言ではない。言葉を換えるならば、教育活動はすべて、授業の延長線上にあるといってもよい。

それほど重要な授業であるからこそ、古今東西の教育学者あるいはその実践者によって絶え間なく研究され、試行されてきているのである。そして、難しいものである。

しかし、優れた実践は間違いなく存在し、よい授業を体感している生徒は、存在する。にもかかわらず、長い教育の歴史の中で、優れた授業が受け継がれてこなかったのはなぜか。

それは、優れた授業実践の前提となる、教科ごとの指導方法以前の、基本的なことが十分に検討されてこなかったからではないかと考える。つまり、優れた授業の実践者はそのことを当然の前提として、言及することをせず、次の段階にすすむのが常であり、参観者はそこに展開される実践に目を奪われ、それを支えている授業者の不断の努力を見落としてきてはいなかっただろうかという点である。

そうした視点から、授業の成立についてのべてみたい。

本稿で述べる内容は、授業成立の最低条件である。しかし、それなくして、いかなる工夫も表層的になり兼ねないとする。

授業が成立するとは、教師が教えること(教授)と、生徒が自ら考えること(学習)が十分に機能し、生徒個々に学習が成立することである。そのために必要な要件を洗い出してみたい。

3. 学習集団の形成

昨今、「一斉授業」が批判の対象となることが多い。全員が一方向を向き、一斉画一的な、教師の一方的な講義形式のような授業を「一斉授業」と定義づけるならば、その批判は避けられない。しかし、一人の教師が、集団に対して、適切な対応をしつつ、集団を形成する一人ひとりの生徒に配慮し、学習が成立するよう工夫された授業であり、集団が学習集団として鍛えられているならば、形態が従来の一斉の形であろうと、その批判は当たらない。むしろ、日本特有の効率のかつ効果的な授業形態とすることもできる。さらに言えば、現在の学校制度の下では、教師と生徒、生徒と生徒の間に信頼関係を築くまでは、一斉授業の時間は必須のものとする。むしろそうした準備なしに、様々な学習形態や形式を取り入れても有効には働かない。安易にグループ活動を取り入れたり、様々な形態を試みたりしても、単位時間を有効に活用した、密度の濃い充実した学習活動はおぼつかないであろう。

今日、学習形態は多様なものが提案され、個人を中心に考えるもの、グループの形を取るものなど、様々なものがある。しかし、日本の多くの学校の基本の形は学級、クラスである。授業を実施する教室に集った生徒の集団が学習集団となっていることが重要である。

どのような形態の授業を構想するにしてもその集団が、学習集団として育成されていなければ、授業は成立しない。

ではどのようにすれば集団を学習集団として育てることができるのか。

生徒集団の育成というと生徒指導的な集団訓練がイメージされることが多い。そうした集団を鍛える視点もあるが、ここでは、あくまで教科学習の中で集団を育てることについて述べる。

教科学習の指導の充実と学習集団の形成は密接に関係する。どちらが先と言えるものではなく、教科学習を通して、集団は学習集団として育てられていくと考える。

集団が優れた学習集団に成長するためには、ま

ず第一に、生徒と教師間、生徒と生徒の信頼関係が大切である。生徒が安心して学ぶことができる集団、安心して間違ふことのできる集団である必要がある。間違ふことのできるから、安心して、発言ができ、質問ができる。そうした学習集団の中でなければ、学習指導要領に示されている言語活動も十分には行うことはできないであろう。そうした集団をつくっていくのは、様々な場面での、教師の絶え間ない意図的な働きかけである。

学習集団の育成は優れた教科指導の一斉授業と表裏一体のものである。優れた授業は学習集団の存在が欠かせないものであり、優れた一斉授業は学級集団を優れた学習集団としてさらに育てていくのである。そのように育てられた学習集団の中に身を置く生徒は、安心して学習に取り組むことができる。そうした環境を整えるのは教師としての務めでもある。

ここでは、特別な事情をもつ、個別に配慮を必要とする事例については記述せず、学習集団の育成の重要性を述べ、その表裏一体となる一斉指導の在り方から論述する。

4. 学習集団形成の要件

数々の優れた一斉授業には校種、教科を超えて、共通する教師の働きかけがある。

研究授業や参観する授業の多くは、1時間か2時間続きの授業である。その前後を含めても、数時間の公開であることが多い。そこから、その授業者のそれまでの積み上げのすべてを読み取るとは難しい。優れた授業は、それまで担当の教員が積み上げてきた指導の結晶である。何時間もかけて、あるいは何年もかけて作り上げてきたものである。しかし、参観者はとかく表面的な部分のみにとらわれ、そこに至るまでの本質的な取組を見逃しがちである。まして、経験の少ない若い教員は陥りがちである。

ここから記述することは、学級という単位で授業を成立させていくための要件、学習集団形成の要件と考えられるものである。

(1) 信頼関係構築のために、教師自らが、自分自身を開示すること。

授業開きと呼ばれる最初の時間、生徒と教師の出会いの場面で行われる。どこまで自分自身を開示するかは適切に見極めながら行われなければならないが、教師も勇気を持って行われなければならないことである。

勇気とは「私はこういう人間です。私は　そういう自分と仲よくつきあってきました。みなさんが私を好いてくださればありがたいことです。しかし、私を好いてくださらないからといって私の値打ちがなくなる訳ではありません。」という思いで教師側が先に心を開くことを言う。どこまで開示するかは、生徒の実態による。急ぐ必要はないが、生徒を安心させることを第一の目標とする。

(2) 契約を交わすこと

教師がどのような考えを持ち、以後どのような指導をしていこうとしているのかを明確にする。言葉を換えて言えば、授業における約束である。たとえば、

- ①教師が説明しているときや発問をしているときはしっかり聞くこと
- ②生徒が発言しているときはしっかり聞くこと。
もし、その発言を聞いていないために、その後の教師の質問に答えられなかった場合は、最初に発言した生徒にもう一度話してもらうことにすること。
- ③指名された場合には、必ず、意思表示をすること。わからない場合はなぜわからないかを話すこと。
- ④級友が間違った発言をしても笑ったり、揶揄したりしないこと。　　など

ここで大事なことはそのことが定着するまで教師は根気強くやり直しをさせたり、注意したりして、この約束事が定着することに努力することである。根気強くである。この教師がどのような方針で授業を展開し、自分たちを指導しようとしているのかを様々な場面で示すことである。それは、

小、中、高、問わず必要な事である。

こうしたことの積み重ねによって、集団を学ぶことに集中できる学習集団に育てて行くことになるのである。これは一朝一夕で完成するものではなく、絶え間ない教師と生徒の努力によってできあがっていくものである。教師のこうした努力が語られることは少ない。優れた実践を行う教師にとってこのことは言わずもがなのことだからである。そのうえに、教科の優れた授業が成立していることを忘れてはならない。

5. 一斉授業における技術

前述した積み重ねによって、信頼関係を築いた集団に対して、一斉授業を行う。前にも述べたが、一斉授業の前提は、生徒集団が学習集団であることだが、優れた一斉授業を行うことで学習集団は一層鍛えられる。

一斉指導に不可欠な技術を述べる。

(1)ねらいの明確化

その単位時間の時間のねらいを明確に示す。生徒の目標が定まり、充実感をもって授業に臨むために重要であり、評価を明確にすることができる。

(2)説明

児童生徒への説明は、言葉を選び、吟味された言葉で明確に行う。当然のことながら、事前に、用いる言葉、話し方について教師が吟味し、準備するのは当然である。漫然と話すのは説明とは言わない。

こうした意識を持って授業に向かう教師は自然に言葉が磨かれていく。

(3)発問

発問は授業を牽引していく重要な役割を果たす。生徒が混乱しないように、吟味された言葉で発せられなければならない。

ここで言う発問とは、その授業の核心に触れるものをいう。いくつかを組み合わせて、授業を進めていくが、その役割を十分に吟味して、発せら

れなければならない。

たとえば、

- ・「何がメロスを走り続けさせたと思いますか」
- ・「なぜ、メロスは走り続けたのだと思いますか」

では自ずと生徒の答えは異なってくる。前者からは単語での回答しか得られないであろうが、後者の問いかけには、生徒が自分自身の言葉で文脈を捉えながら答えることが期待できる。

一つの例であるが、発問とは、生徒の反応と授業の展開を考え、一字一句吟味し用意されるものである。

周到な準備がなされてこそ、臨機応変も可能になるのである。

(4)指名

どの生徒に指名するかは、教師が授業をどのように進めるかという計画に関わる。「手をあげた生徒に当てる」だけの指名方法では計画性も何もない。指名には授業を進めていく役割と評価の役割がある。生徒のレベルごとに理解度を確認することで、授業中の評価(形成評価)ができるのである。

教師が意図をもって、指名し、発言させることによって、発言が意味を持つのである。

(5)受容

発問に対しての生徒の答えを聴く教師側の態度である。

許容的な雰囲気の中で相づちを打ちながら聴く。真剣に聴くことが重要である。教師は全身を耳にして聞くことが大切である。

それは、緊張しながら応える生徒への応援になる。さらに他の生徒に対して、聴く姿を示すことになる。

どのような内容であっても、受け入れ、聴くこと。このことは、その生徒の次回の発言を促すことにつながり、他の生徒に安心感を与える。他の生徒は自分が指名された時を思っ、その場面を見ているはずである。

生徒が発言しない、質問に答えないなどの嘆きの声を耳にすることがあるが、生徒を責める前に教師が真剣に聴いていたかどうかを問いたい。

たとえば、生徒が真剣に話している時に教師は板書したりしていないだろうか。いつも、教師の望む答えや正解を答える生徒にばかりに指名していないだろうか。生徒が答えようと真剣に考えているとき、急ぐあまり、途中で他の生徒に当てたりしなかっただろうか、等々。生徒に、しっかり発言する力を付ける大切な場面である。しっかり聴かなければ、生徒はしゃべらないと覚悟すべきである。

(6) 支持

相手のとった行動や発言を承認・肯定することをさす。

(7) 繰り返し

話のポイントをつかまえて、投げ返す。このことにより発表した生徒は自分の意見が教室全体に受け入れられたことを確認し、他の生徒は、教師によって繰り返されることによって、より明確に受け止めることができる。

(8) 明確化

話している本人がはっきり意識化できていないことを言語化、焦点化すること。

「あなたの言っていることは・・・ということですね。」と言語化して返すことにより、生徒自身の考えを確認することができ、他の生徒と共有化することができる。

教師は、まさに生徒の発言をしっかり聴いていなければ、言外の生徒の言葉を聴くことはできない。

(9) 質問

相手の話をリードするための質問

(1)から(9)は一斉授業の形態を取るときの指導技術の一部であり、これらを組み合わせながら、

生徒との応答がなされていく。応答にならず、教師の一方的な「おしゃべり」になったり、教師が一人で質問し、教師が答えることになったりした場合は、それは授業と呼べるものではなくてある。そうなったとき、生徒不在であることが明らかであり、生徒はただ黙って教師の話聞かされていることになる。その時の生徒の頭脳は停止状態になり、頭脳が鍛えられることはない。しかし、教師がそうした授業に陥ることは少なくない。そのことに悩んでいる教師も少なからず存在する。

(1)から(4)は、これまでも授業を語るとき、用いられてきた言葉である。しかし、現場で、それぞれの言葉の真の意味が理解され、実践されてきたかという点、そこには疑問が残る。少なくとも、優れた実践者はこうした部分をしっかりと行っている。

(5)から(9)は、カウンセリングなどで用いられてきた言葉である。授業中の教師の行動を表すにふさわしい言葉と考え、使わせていただいた。教師にはそうした技能は、当然必要とされるものである。

教師は「カウンセリングをするのではなく、カウンセリングの知見を生かした教育実践をするのである」(国分康隆)という言葉にも示される通りである。

「優れた授業」を分析してみると、実践者である教師はこうした技術を身につけ、行動していることがわかる。

授業者本人が意識している意識していないにかかわらず、このような行動が生徒を安心させ、集中させていることは間違いない。時に、優れた授業者は無意識的にこれらのことを行っていることが多い。故に、優れた授業者はあえてそのことに触れることは少ない。無意識的に行っていることを、人はことさらに語ることはしないからである。

しかし、実は、これらのことを日々丁寧に繰り返す事が、学級集団を学習集団へと成長させることになる。このことが優れた教科指導の授業の基

盤となっているのである。

今回、多くの優れた授業を分析し、その基盤となる要素を抽出し、分類してみた。

これらの要素は、学級の生徒と教科担当者である教師の間に、教科指導という場を通して、信頼関係を築いていくうえで欠かせない要素である。つまり、優れた教科の授業を通して、学級が学習集団として鍛えられ、よき学習集団に育つことにより、よりよい授業が成立するというサイクルを生み出すのである。

このことは、単位時間の優れた授業は、実は、日頃の授業の積み重ねによって成り立っていることを示している。繰り返しになるが、そのことは日常の中で時間をかけて培われる技術であり、顕著に示されることはない。それゆえ、初任者が研究授業などから学び取ることが難しい部分である。

もし、これらの基礎となることの重要性を認識し、技術としての認識を持って、教師として赴任するならば、せつかく採用になってもやめてしまうという不幸なことは少なくなるのではないかと考える。

6. 「優れた授業」の可能性

ここまで、授業の基本となる学習集団の重要性について述べてきた。学習集団ができることによって、授業の展開は広がっていく。

授業が学校教育の根幹であることは前にも述べたが、「よい授業」は、さらに、未来の「優れた教師」を育てていくことにつながる。「はじめに」の中で述べたが、3ヶ年教職に関わる同じ講義を持ち、同じアンケートを行ってみたが、教職に興味を持つ学生の多くは「よい授業」の記憶を持っている。教職を目指そうとする学生のほとんどは「よい授業」の記憶を鮮明に持っていることが多かった。

さらに、模擬授業などを実施してみると、現場実践の経験がなくても、見るべきものがある授業を展開する学生は、自分が経験した授業のよいイメージを思い描きながら、行っていることが多かった。理論的な裏付けはなく、夢中で行ってい

るにもかかわらず、曲がりなりにも、授業の体裁をなしているのを見ると、改めて、小、中、高と過ごす学校における授業の影響を感じた。

「優れた授業」は優れた教員の輩出にもつながる可能性を持っているのである。

7. 「教養」の重要性

ここまで、授業を成立させるための「技術」の必要性について述べてきた。学校現場で若き教師に起こる悲しい出来事に出会い、それを最小限にとどめるためには、教師としての最低限の技術に関する知識が必要であるという思いからである。

学校現場における若き教師の存在は、かけがえないものである。未熟であっても、その懸命さと若さは学校に活力を与えてくれるものであり、職業人としての教師集団の意識を高める役割も果たしてくれる大切な存在である。まさに、教育の未来を担う存在である。

社会は大きく変化し、グローバル化の時代を迎え、学校もその中で大きく揺れ動いている。学校よりも、児童生徒がその大きな揺れの中に置かれていると言っても過言ではない。学校はこれまで以上に多くのことを求められることが予想される。さらに、これまでの経験のみでは乗り切れないケースも増えてくることだろう。

そういう時代を生きる若き教師に語るには、あまりに古典的な技術論に終始してしまったかにも思うが、だからこそ、必要であると言いたい。さらに、これまで述べた技術に加え、是非身につけておくべきものとして、「教養」について述べる。

「何を持って教養というか」という問題はあろうが、ここでは、「教養」の基礎となるであろう多くの学びの必要性について述べる。

それぞれの学生が学ぶ専門性の高い大学の学びに加え、考え方の基盤を培う広い学びが教師を目指す学生には求められると考えられる。知的な好奇心を持ちながら、広く読書をしたり、さまざまな人の話を聞いたりという本来の大学生活が重要である。

このことはとりもなおさず、時代の変化や多様

な児童生徒に柔軟な対応ができる態度を養うことにつながり、より高い教育実践につながる。

本来、教育学は、医学、心理学、法学など様々な学問によって支えられている。教師を目指す学生はそうした知見を生かす基盤となる教養は必須のものなのである。

8. 学び続ける力

教職に就き、定年まで働き続けると仮定すると、最も長い場合、その期間は30年あまりになる。教諭として教壇に立ち続ける道を選ぶもの、行政機関での経験ののち学校に戻るもの、教諭から主幹、教頭、校長という役割を担うことになるものなど、様々である。

そのいずれであっても、児童生徒の学びに関わり続けることにちがいはない。

その間、優れた教師であり続けることは難しい。その原因の一つに、あたりまえであるが、その対象とする相手が児童生徒であることである。教師は経験を積むに従って、技術を身につけ、成長していく。しかし、対象とする相手の年齢は変わらない。その環境の中で、教師は大きく変化していく。

児童生徒を、未来を担う存在として畏敬の念を持って、真摯に向かい合い、学び続ける教師もいれば、自ら学ぶことをやめ、数年の経験にあぐらをかき、児童生徒の才能や無限の可能性を感じ取ることもできなくなり、ただ自分より知識のない存在としてしか見ることができなくなる教師もいる。

もちろん比率として前者が多いのは当然であるが、後者が極めて少ないかというとは決してそうとも言い切れないのが現実である。

このちがいの要因は詳しいデータを取ってのことではないので軽々には言えないが、その一つに「学ぶ力」があると考える。

教育の現場には課題が山積している。その課題を自らの課題ととらえ、解決のために、これまで学んだことのない専門分野を学び、解決しようとする姿勢、目の前の児童生徒のために自分の指導

力を向上させようと学ぶ姿勢や、職場のチームと協同で教育課題に取り組もうとする姿勢など、そうした学び続ける姿勢を持ち続ける限り、後者のようになることも教師として老いることもない。それを支えるのが「学ぶ力」である。

児童生徒に学ぶことを求める教師に、ことさらに「学ぶ力」の必要性を述べるのは矛盾しているようだが、実はもっとも求められる力である。

知識を獲得する学習や決められた試験科目の学習の時期から解放され、自らの課題を探究することができる大学はそうした力を磨く大切な時である。

課題解決力、探究力の育成はグローバル社会に対応する重要な力として、小中高を通じて重要性は認識されているが、教師という職業においてこそ、必要とされるものである。

9. 終わりに

学校現場で優れた教師を育てたい、若き教師の力を現場に生かしたいという願いを持ち続け、今回レポートとしてまとめてみた。根拠をしっかりと示すことなく記述した部分や、思いが先行している部分が在ることは否めず、非常に散漫なものになってしまったことは反省すべき点である。今後は調査を続け、さらに、根拠を示し、優れた教師の育成に資する内容を目指したいと考えている。

教育現場は、児童生徒を取り巻く環境の変化に対応しながら、さらに、社会的な要請や変化に対応しながら奮闘している。その中で教師も苦悩している。

それでも教師が教師を続けられるのは、児童生徒との間で感じる一瞬の充実感や喜びがあるからである。

しかし、若き教師の中には、その喜びに出会う前に、学校を離れてしまうものもいる。また、誤った目標にとらわれたり、批判されることを恐れるあまり、自己防衛に走り、ゆがんだ教育観を持ってしまうものもいる。このことは、教育現場にとって、大きな損失である。そうしたことを少なくするために、必要と思われる最小限の技術と

資質について私見を述べた。

付記 本稿は2014年12月15日に開催された発達科学研究所研究会での発表を原稿にしたものである。

